

# 私立中高一貫校における中入生と高入生の比較分析

—中学受験のメリット・デメリットの実証的検討—

比較教育社会学コース 須藤 康介

The Comparison of SJHSE and SHSE in Private Combined Junior High and High School  
—Empirical Study on Merit and Demerit of Junior High School Entrance Examination—

Kosuke Sudo

The purpose of this article is to clarify the merit and demerit of junior high school entrance examination by comparing the conscious and behavior of SJHSE (students who enter school through junior high school entrance examination) and SHSE (students who enter school through high school entrance examination). By the analysis of survey data for 11th grade students who belong to Tokyo private combined junior high and high school, three findings were acquired. Firstly, in the upper and middle rank schools, SJHSE is a little dull in academic achievement. Secondly, the statement that SJHSE is easily adapted for school life is supported in the upper and middle rank schools. Thirdly, the tendency for SJHSE not to feel social inequality is seen very slightly.

## 目次

1. 本稿の課題
2. 中学受験に関する言説
3. 使用するデータ
4. リサーチクエスト
5. 変数の設定
6. 中入生・高入生の基本情報
7. 分析結果
  - A. 「中入生のほうが学業適応が高い」か？
  - B. 「中入生のほうが学校生活が充実している」か？
  - C. 「中入生のほうが社会的不平等を感じていない」か？
8. まとめと結論

### 1. 本稿の課題

本稿の課題は、私立中高一貫校における、中入生（中学校からその学校に入学している生徒）と高入生（高校からその学校に入学した生徒）の意識・行動を比較し、中学受験のメリット・デメリットとされる事項を実証的に検討することである。

これまでの中学受験に関する研究は大きく三つのタイプに分けられる。一つ目は、中高一貫校の制度・理念やカリキュラムを明らかにする研究である。たとえば、樋田（1998）、安藤（2005）、油布・六島（2006）

などが挙げられる。二つ目は、どのような保護者・子どもが中学受験を選択するかに焦点を当てた研究である。たとえば、松浦・滋野（1996）、ベネッセ教育研究開発センター（2007）、片岡（2009）などが挙げられる。そして三つ目は、中高一貫校に通う生徒の意識・行動の特徴を明らかにし、中高一貫教育の効果や社会的意味を追究する学校社会学的な研究である。ただし、このタイプの研究は前二者に比べて蓄積が乏しく、中学受験で入学した子どもたちが、その後具体的にどのような意識・行動を有することになるのかは、ほとんど明らかにされていない。大規模サンプリングに基づいた実証的研究では、須藤（2011）が挙げられる程度である。

本稿は、この三つ目の研究に位置づくものであり、須藤（2011）が、公立中学生と私立中学生の比較が中心であったのに対して、本稿は、同じ高校における中入生と高入生の比較を中心に分析を行う。中入生と高入生を比較することで、入試難易度や学校の教育方針を統制した、中学受験による入学の効果に接近できると考えるためである。

このような本研究の意義は、日本の学校教育制度における早期選抜の機能を明らかにできる点である。中学受験という早期選抜は、受験する子どものみならず、その子どもたちの育成を通して日本社会全体に対しても影響を与え得るものである。藤田（2006）は、

中学受験をリッチフライン（質の高い教育を求める富裕層の動き）の代表例と位置づけているが、その帰結が具体的にいかなるものであるのかを明らかにすることは、今後の教育や社会の在り方を考える上でも重要となるだろう。

## 2. 中学受験に関する言説

中学受験、ひいては中高一貫教育のメリット・デメリットに関して、実証的な学術研究は少ないものの、一般言説レベルでは数多くのものが存在する。ここでは、代表的なものとして、旺文社の『首都圏2013年度入試用 中学受験案内』を参照する。この種の受験案内には、各学校の紹介に進む前に、中学受験に関する一般的な情報が掲載されていることが多い。同書では「中学受験する理由」として、次の五つが挙げられている。

第一が「大学進学に有利」である。6年間の計画的かつ継続的なカリキュラムが、難関大学進学を有利にしている旨が述べられている。第二が「一貫した教育方針の下での指導が受けられる」である。主要5教科に留まらず、建学の精神（自主自律の精神、国際社会で活躍など）に基づいた教育を継続的に受けられることが述べられている。第三が「人間教育を重視した指導が受けられる」である。学年間の交流を含む行事や部活動などを通して、豊かな人間性が育成されると述べられている。第四が「時代にマッチした授業が受けられる」である。語学教育や情報機器教育などを特色としている中高一貫校が多い旨が述べられている。第五が「最新の施設・設備で学べる」である。冷暖房や視覚聴教室が充実していることが述べられている。

一方で、中学受験のデメリットについても、同書において言及されている。それは、まず、学費がかかるという点、そして選んだ学校の教育方針が子どもに合わない可能性がある点である。別の言説を参照すれば、出羽（2009）や瀬川（2009）は、私立中高一貫校にも一般的な公立中学校・高校と同様にいじめや教員の不祥事があり、さらに、学校側がそれらを隠蔽する傾向があることを指摘している。また、インターネット上の中学受験に対する質疑応答では、中高一貫校に入学すると、長期間にわたって均質な集団の中で学校生活を送ることになるため、世間知らずの子どもに育ってしまうのではないかと懸念が少なからず寄せられている。

このように、中学受験や中高一貫教育のメリット・

デメリットは、数多く議論されている。しかし、これらの論点はほとんどの場合、エビデンスに基づいて議論されたものではなく、印象論や体験論で語られている。本稿は、これらの言説のすべてを検証することはできないが、いくつか主要なものについて、実証的に検討を加えるものである。

## 3. 使用するデータ

本稿で使用するデータは、東京大学教育学部が2006年度に実施した「首都圏の私立高校生の生活・意識・行動に関するアンケート」である。この調査は東京都の私立中高一貫校に通う高校2年生を母集団として実施されたものであり、学校タイプ（入試ランク、共学別学、大学附属かどうか）にできるだけ偏りが生じないように、18校が対象として選定された。調査は学校を通じた集団自記式で2006年10月～2007年1月に実施され、最終的な有効回答数は3426名である<sup>1)</sup>。

分析の際には、入試ランク（上位校・中位校・下位校）×共学別学（共学校・男子校・女子校）の類型ごとの生徒数比率が母集団における同比率に一致するように、ウェイト調整を行っている。母集団における生徒数は、学習研究社『私立中学受験案内 2007年入試用』から算出した。また、入試ランクは首都圏模試2006年結果偏差値（男女中間値・第1回午前入試）80%合格ラインを用い、在籍生徒数ができるだけ均等になるように、偏差値60以上を上位校、47以上60未満を中位校、47未満を下位校とした。

ただし、本稿は中入生と高入生の比較検討を目的とするため、高校入試による生徒募集を行っていない高校は、分析から除外する。高校募集がスポーツ入試のみである高校も分析から除外した。したがって、実際の分析対象は11校、2406名となる。本稿の分析はすべて「高校募集を行っている私立中高一貫校」を母集団としたものである。

## 4. リサーチクエスション

本稿の課題、および先行言説における指摘をふまえ、以後で検証するリサーチクエスションは次の三つである。順に説明する。

RQ1：「中入生のほうが学業適応が高い」か？

前述のように、『中学受験案内』などでは、中学校

から中高一貫校に入学していると、中高のカリキュラムの連続性や、中学校における発展学習や高校内容の先取り学習によって、高校生になったときの学業適応が高くなることが示唆されている。井上（2001）のように、その点を強調する論者も多い。しかし、服部（1995）のように、高校受験がないことによって、生徒に中だるみが生じているという指摘もある。はたして「中入生のほうが学業適応が高い」のだろうか。

RQ2：「中入生のほうが学校生活が充実している」か？

やはり『中学受験案内』などでは、中学校から中高一貫校に入学していると、部活動などを継続的に続けられるため、また価値観が近い同級生と時間をかけて交友を深められるため、高校生活が充実しやすくなるとされている。しかし、裏を返せば、このような環境は、内藤（2001）が言うような、閉鎖的・硬直的で逃げ場のない交友関係が長期間継続することでもある。はたして「中入生のほうが学校生活が充実している」のだろうか。

RQ3：「中入生のほうが社会的不平等を感じていない」か？

中学生という発達段階は、自分の周辺だけの世界観から離脱し、社会がいかなるものかを認識し始める時期でもある。また、木原（1982）などが指摘するように、この時期は学校の同級生が「準抛集団」になることが多い。したがって、中高一貫校という生徒どうしの均質性が高く、さらに経済的・文化的に恵まれている集団の中にいることで、社会の不平等などに無自覚になるということがあるかもしれない。はたして「中入生のほうが社会的不平等を感じていない」のだろうか。

## 5. 変数の設定

分析で使用する変数について説明する。まず、学業適応を表す指標は、校内成績と一週間勉強時間の2つを用いる。校内成績は5段階（上のほう～下のほう）で尋ねているものを、学校ごとに平均値3、標準偏差1になるように変換して用いる。学校ごとに校内成績の平均値に差があったため、それを補正するためにこのような変換を行った<sup>2)</sup>。一週間勉強時間は、平日勉

強時間の5倍と休日勉強時間の2倍を加算して算出した。

学校生活が充実しているかどうかの指標は、「学校生活に満足」「部活動に満足」「文化祭に積極的」の3つを用いる。「学校生活に満足」は、「学校生活に満足している」という質問項目に対し、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を1、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を0とするダミー変数とする。学校生活全般への適応を測る指標である。「部活動に満足」は「部活動に満足している」という質問項目に対し、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を1、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」「入っていない」を0とするダミー変数とする。つまり、部活動未加入の生徒は、満足していないほうにコードした。中高一貫教育のメリットとして語られることが多い、部活動への満足度を測る指標である。「文化祭に積極的」は、「文化祭や学芸発表会」という質問項目に対して、「とても積極的」「まあ積極的」を1、「あまり積極的でない」「まったく積極的でない」を0とするダミー変数とする。中心的な学校行事へのコミットの程度を通して、学校に適応しているかどうかを測る指標である。

社会的不平等を感じているかどうかの指標は、「貧富の差が大きい」「努力次第で裕福になれる」「低給料は自己責任」の3つを用いる。「貧富の差が大きい」は、「現代の日本は、お金持ちと貧しい人の差が大きい」という質問項目に対し、「とてもそう思う」「まあそう思う」を1、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」を0とするダミー変数とする。社会的不平等の認知を直接尋ねる指標である。「努力次第で裕福になれる」は、「日本は、本人のがんばりしだいでお金持ちになれる社会だ」、「低給料は自己責任」は、「低い給料しかもらえないのは、その人の努力が足りなかったからだ」という質問項目に対し、それぞれ「とてもそう思う」「まあそう思う」を1、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」を0とするダミー変数とする。これらは社会不平等の認知を直接尋ねたものではないが、「そう思う」と回答している場合は、社会的不平等は努力で克服可能であり、それほど強固なものではないと感じていると解釈した。

次に、分析で用いる統制変数について説明する。まず、文化資本スコアは、家にある本の冊数、ピアノの有無、美術品・骨董品の有無をカテゴリカル主成分分析で統合して作成した。また、文化資本スコアを均等三分割することによって、文化階層上位・中位・下位

表 1 変数の記述統計量

	有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
校内成績	2377	1.300	5.200	3.000	0.998
一週間勉強時間	2375	0.000	39.000	7.040	7.558
「学校生活に満足」	2393	0.000	1.000	0.680	0.467
「部活動に満足」	2390	0.000	1.000	0.470	0.499
「文化祭に積極的」	2295	0.000	1.000	0.620	0.485
「貧富の差が大きい」	2372	0.000	1.000	0.760	0.427
「努力次第で裕福になれる」	2366	0.000	1.000	0.570	0.495
「低給料は自己責任」	2375	0.000	1.000	0.500	0.500
女子ダミー	2405	0.000	1.000	0.520	0.500
きょうだい数	2374	0.000	8.000	1.160	0.790
文化資本スコア	2340	-1.420	2.346	0.000	1.000
附属校ダミー	2406	0.000	1.000	0.680	0.468
第一志望ダミー	2386	0.000	1.000	0.370	0.484
中入生ダミー	2250	0.000	1.000	0.460	0.499

を設定した<sup>3)</sup>。十分とは言えないが、その生徒の家庭がどれほど文化的水準が高い状況にあるかを示す、一つの指標になるだろう。

女子ダミーは、女子を1、男子を0とするダミー変数である。きょうだい数は、兄弟姉妹の合計人数である。附属校ダミーは、通っている中高一貫校が、大学の附属校・系列校である場合を1、そうでない場合を0とするダミー変数である。第一志望ダミーは、現在通っている学校について、「ぜひこの学校に入学したかった」を1、「もっと入学したい学校が他にあった」「この学校に入学するつもりではなかった」「特にどこの学校に入学したいということではなかった」を0とするダミー変数である。これらは、家庭・学校の属性や入学前の状況を統制して、中入生であることの効果を示すための統制変数として用いる。なお、男子校ダミーと女子校ダミーは、女子ダミーとの相関が高く、また、男子校・女子校がサンプル内に少数しか存在しなかったため、分析に投入しなかった。

最後に、学校の入試ランクについてであるが、本調査データでは、前述のように、首都圏模試2006年結果偏差値の80%合格ラインをもとに、上位校・中位校・下位校を設定している。ただし、本稿では、高校募集をしていない高校（上位校に多い）を分析から除外するため、分析サンプルにおける上位校の生徒数が極端に少なくなる。よって、上位校と中位校を統合して「上・中位校」として、分析に用いる。

多変量解析で用いる変数について、記述統計量を示したものが表1である。

## 6. 中入生・高入生の基本情報

まず、中入生と高入生の基本プロフィールの違いを確認するため、入試ランクと中入高入の関係、中入高入と文化階層の関係をクロス集計で示す。結果が表2～4である。

表2より、上・中位校のほうが中入生の比率が高いことが分かる。裏を返せば、下位校は高校受験によって生徒を確保する傾向がある。また、表3で中入生と高入生の出身階層を比較すると、中入生のほうが、階層上位が多い。ただし、表4から、その関連は上・中位校のみで顕著で見られ、上・中位校の中入生が特に出身階層が高いことが分かる。これは、須藤（2011）における、私立下位校の生徒と公立中学生では、出身階層がそれほど変わらないという知見と一致している。

## 7. 分析結果

本節では、RQ1～3を順に検証する。なお、前分析で確かめたように、上・中位校では中入生がマジョリティであり、下位校では高入生がマジョリティである。つまり、上・中位校では中入であることが前提に学校が運営される程度が大きく、下位校では高入であることが前提に学校が運営される程度が大きいと考えられる。したがって、上・中位校と下位校では、中入生であることの効果が別様に現れることが予想される。よって、以下の分析はすべて上・中位校と下位校を区別して行う。

表2 入試ランクと中入高入の関係 (クロス集計)

		中入高入		合計	有効度数
		中入生	高入生		
入試ランク	上・中位校	61.8%	38.2%	100.0%	(1043)
	下位校	32.8%	67.2%	100.0%	(1207)
合計		46.3%	53.7%	100.0%	(2250)
Pearsonのカイ2乗検定		p=0.000			

表3 中入高入と文化階層の関係 (クロス集計)

		文化階層			合計	有効度数
		上位	中位	下位		
中入高入	中入生	35.7%	31.3%	33.0%	100.0%	(1012)
	高入生	29.1%	33.3%	37.6%	100.0%	(1174)
合計		32.2%	32.4%	35.5%	100.0%	(2186)
Pearsonのカイ2乗検定		p=0.004				

表4 入試ランクごとの中入高入と文化階層の関係 (クロス集計)

入試ランク			文化階層			合計	有効度数
			上位	中位	下位		
上・中位校	中入高入	中入生	39.9%	31.8%	28.3%	100.0%	(622)
		高入生	32.4%	29.7%	38.0%	100.0%	(374)
	合計		37.0%	31.0%	31.9%	100.0%	(996)
	Pearsonのカイ2乗検定		p=0.005				
下位校	中入高入	中入生	29.2%	30.4%	40.4%	100.0%	(391)
		高入生	27.7%	35.0%	37.3%	100.0%	(801)
	合計		28.2%	33.5%	38.3%	100.0%	(1192)
	Pearsonのカイ2乗検定		p=0.294				

表5 校内成績の規定要因 (重回帰分析) 入試ランクごと

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
女子ダミー	0.077	0.039		0.131	0.066	*
きょうだい数	-0.027	-0.021		-0.067	-0.056	+
文化資本スコア	0.011	0.011		0.071	0.068	*
附属校ダミー	-0.043	-0.020		-0.070	-0.034	
第一志望ダミー	0.092	0.047		0.012	0.006	
中入生ダミー (定数)	-0.170	-0.085	*	-0.026	-0.013	
	3.084		***	3.086		***
決定係数	0.011			0.012		
自由度調整済み決定係数	0.005			0.007		
回帰のF検定	p=0.091			p=0.030		
有効度数	969			1156		

(\*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05 + p<0.1)

A. 「中入生のほうが学業適応が高い」か？

まず、RQ1を検証する。表5が校内成績を従属変数とした重回帰分析、表6が一週間勉強時間を従属変数とした重回帰分析の結果である。

表5より、上・中位校において、わずかではあるが、中入生のほうが校内成績が低いことが分かる。高入生は高校受験によって比較的近い時期に選抜されたため、「落ちこぼれ」がまだ発生していないのに対して、

中入生は中学時にハイペースな学習についていけなくなっている生徒が存在するため、平均として校内成績がわずかに低くなっていると考えられる。しかし、表6が示す勉強時間に着目すれば、中入生と高入生でほとんど差がない。つまり、入試選抜を受けて同じ高校に入っている生徒どうしであれば、中入生だから学習習慣が身についている／いないということはないようである。なお、本稿の関心からは外れるが、表6にお

表 6 一週間勉強時間の規定要因（重回帰分析）入試ランクごと

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
女子ダミー	1.171	0.077	*	0.579	0.040	
きょうだい数	-0.501	-0.049		-0.694	-0.080	**
文化資本スコア	0.844	0.113	***	1.026	0.137	***
附属校ダミー	-4.752	-0.281	***	-3.456	-0.235	***
第一志望ダミー	-0.493	-0.032		0.474	0.031	
中入生ダミー (定数)	0.517 10.759	0.033	***	-0.195 9.005	-0.013	***
決定係数	0.123			0.068		
自由度調整済み決定係数	0.117			0.064		
回帰のF検定	p=0.000			p=0.000		
有効度数	968			1148		

(\*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05 + p<0.1)

いて、附属校ダミーの回帰係数は大きな負の値を示しており、大学附属校・系列校の生徒は、勉強時間がかなり短いことが窺える。

#### B. 「中入生のほうが学校生活が充実している」か？

次にRQ2を検証する。表7が「学校生活に満足」を従属変数にしたロジスティック回帰分析、表8が

「部活動に満足」を従属変数にしたロジスティック回帰分析、表9が「文化祭に積極的」を従属変数にしたロジスティック回帰分析の結果である。

表7～9から、上・中位校において、中入生のほうが学校満足・部活満足が高く、中心的な学校行事である文化祭に積極的に参加していることが分かる。したがって、学校生活への適応については、中入生は高入

表 7 「学校生活に満足」の規定要因（ロジスティック回帰分析）入試ランクごと

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
女子ダミー	-0.127	0.881		0.678	1.970	***
きょうだい数	-0.142	0.868		-0.022	0.978	
文化資本スコア	0.128	1.136	+	-0.009	0.991	
附属校ダミー	-0.167	0.846		-0.115	0.891	
第一志望ダミー	0.680	1.974	***	0.654	1.923	***
中入生ダミー (定数)	0.371 0.696	1.450	* **	-0.158 0.263	0.854	
Nagelkerke決定係数	0.047			0.063		
尤度比のカイ2乗検定	p=0.000			p=0.000		
有効度数	978			1156		

(\*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05 + p<0.1)

表 8 「部活動に満足」の規定要因（ロジスティック回帰分析）入試ランクごと

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
女子ダミー	0.226	1.254		0.258	1.294	*
きょうだい数	0.162	1.175	+	-0.003	0.997	
文化資本スコア	0.199	1.220	**	-0.105	0.900	
附属校ダミー	-0.331	0.718	*	0.414	1.513	**
第一志望ダミー	0.628	1.874	***	0.904	2.470	***
中入生ダミー (定数)	0.338 -0.632	1.402	* **	0.057 -0.923	1.059	
Nagelkerke決定係数	0.075			0.090		
尤度比のカイ2乗検定	p=0.000			p=0.000		
有効度数	978			1153		

(\*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05 + p<0.1)

表9 「文化祭に積極的」の規定要因（ロジスティック回帰分析） 入試ランクごと

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
女子ダミー	0.922	2.514	***	0.785	2.193	***
きょうだい数	-0.113	0.893		-0.141	0.868	+
文化資本スコア	0.330	1.391	***	0.069	1.072	
附属校ダミー	-0.415	0.660	*	-0.659	0.517	***
第一志望ダミー	0.520	1.681	***	0.239	1.270	+
中入生ダミー (定数)	0.333 -0.110	1.396	*	0.225 0.635	1.252	***
Nagelkerke決定係数	0.168			0.062		
尤度比のカイ2乗検定	p=0.000			p=0.000		
有効度数	949			1097		

(\*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05 + p<0.1)

生よりも一日の長があると言えるだろう。高入生よりも3年間長くその学校に在ること、友人関係や対教師関係において、いくらかアドバンテージがあると推測できる。下位校においては、高入生の比率が高いこともあってか、中入生と高入生で、学校生活の充実度に明確な差は見られない<sup>4)</sup>。

C. 「中入生のほうが社会的不平等を感じていないか？」

本節の最後に、RQ3の検証を行うことにする。表10が「貧富の差が大きい」を従属変数にしたロジスティック回帰分析、表11が「努力次第で裕福になれる」を従属変数にしたロジスティック回帰分析、表12が「低給料は自己責任」を従属変数にしたロジスティック

表10 「貧富の差が大きい」の規定要因（ロジスティック回帰分析） 入試ランクごと

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
女子ダミー	-0.065	0.937		-0.251	0.778	
きょうだい数	0.160	1.174		-0.084	0.919	
文化資本スコア	0.103	1.108		-0.104	0.901	
附属校ダミー	-0.004	0.996		0.112	1.118	
第一志望ダミー	-0.047	0.954		-0.237	0.789	
中入生ダミー (定数)	-0.043 0.907	0.958	***	-0.096 1.670	0.908	***
Nagelkerke決定係数	0.008			0.012		
尤度比のカイ2乗検定	p=0.534			p=0.193		
有効度数	976			1154		

(\*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05 + p<0.1)

表11 「努力次第で裕福になれる」の規定要因（ロジスティック回帰分析） 入試ランクごと

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
女子ダミー	-0.553	0.575	***	-0.238	0.788	+
きょうだい数	0.137	1.147		-0.125	0.883	+
文化資本スコア	0.150	1.161	*	0.032	1.033	
附属校ダミー	0.389	1.475	*	0.094	1.099	
第一志望ダミー	0.162	1.176		0.017	1.017	
中入生ダミー (定数)	0.288 0.011	1.333	*	0.186 0.330	1.204	*
Nagelkerke決定係数	0.041			0.010		
尤度比のカイ2乗検定	p=0.000			p=0.186		
有効度数	974			1150		

(\*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05 + p<0.1)

表12 「低給料は自己責任」の規定要因（ロジスティック回帰分析） 入試ランクごと

	上・中位校			下位校		
	回帰係数	オッズ比	有意確率	回帰係数	オッズ比	有意確率
女子ダミー	-0.960	0.383	***	-0.692	0.501	***
きょうだい数	-0.015	0.985		0.025	1.026	
文化資本スコア	0.090	1.095		0.065	1.067	
附属校ダミー	-0.040	0.961		-0.089	0.915	
第一志望ダミー	-0.074	0.929		0.196	1.217	
中入生ダミー (定数)	0.016	1.016		-0.001	0.999	
	0.718		***	0.209		
Nagelkerke決定係数	0.068			0.041		
尤度比のカイ2乗検定	p=0.000			p=0.000		
有効度数	977			1152		

(\*\*\* p<0.001 \*\* p<0.01 \* p<0.05 + p<0.1)

ク回帰分析の結果である。

表11より、上・中位校に限って、中入生のほうが、「努力次第に裕福になれる」と思っている傾向がある。ただし、表10と表12より、「貧富の差が大きい」と「低給料は自己責任」という意識については、中入生と高入生でほとんど差がない。つまり、中入生のほうが社会的不平等を感じていないという傾向は、ごく部分的に見られる程度であり、それほど顕著なものではない<sup>5)</sup>。ただし、表11の上・中位校で、附属校ダミーが正に有意となっており、言わば「高学歴を保証された生徒たち」(エスカレーター式で進学すれば、知名度のある大学に入学できる生徒たち)は、中入・高入にかかわらず、努力次第で裕福になれるという社会観を抱いている傾向がある。

## 8. まとめと結論

本稿で主に得られた知見は次の三点である。第一に、上・中位校において、中入生は成績面でわずかに不振となっている。これは、中学受験で入学しておく、高校に入った後の学習が有利になるという通説と対立している。第二に、中入生のほうが継続的な教育で学校生活に適応しやすいという通説は、上・中位校において支持される。中入生は、部活動や対教師関係において、学校生活への適応に一日の長があるのだろう。第三に、中入生は社会的不平等を感じていないという傾向は、ごくわずかに見られたのみであった。さらに、その認知が将来にわたって継続するものであるかどうか確かでないこともふまれば、中学受験によって社会観が偏るといったことはあまり考えられない。

以上のように、中学受験に関する一般言説は、的を

射たものもあれば、誤解に基づいていると思われるものもある。中学受験のメリットとして最も強調して語られる学業に対する有利は、本分析からは支持されていない。これは、入試難易度を統制すると、中高一貫校進学が難関大学進学を有利にするとは言えないという、須藤(2012)の知見と一致している<sup>6)</sup>。一方、学校生活への適応という側面で、中入であることの効果は一定程度見出された。今後、この側面がより着目されてもよいのではなかろうか。

冒頭で述べたように、中学受験は、日本の学校教育制度において早期選抜として機能している。そして、早期選抜はエリート教育という文脈で語られることが多い。しかし、少なくとも高校段階において、子どもたちが中学受験による入学で得ているものは、エリート的な学力や社会観というよりも、むしろ「ささやかな学校満足」なのかもしれない。そして、それも上位校と中位校に限定してのものである。

もっとも、本稿で分析したのは学校生活のごく一側面にすぎない。また、本稿はあくまで、同じ高校に入学している中入生と高入生を比較したものである。たとえば、ある高校に対して、中学受験で入学するほうが高校受験で入学するよりも容易であるとしたら、それは中学受験のメリットと見なし得る。本稿の分析のみで、中学受験のメリット・デメリットを語り尽くせないことには注意が必要である。本稿で得られた知見をふまえつつ、今後、より広範な分析が求められる。

## 注

- 1) この調査は、東京大学教育学部において、「教育社会学調査実習」のゼミの一環として、本田由紀を研究代表に行われたものである。調査の概要は『私立高校生の生活・意識・行動に関する調査報告書』に収められている。



表13 文化資本スコアの作成 (カテゴリカル主成分分析)

		数量化	成分負荷量
家にある本の冊数	ほとんどない	-1.139	0.685
	20冊くらい	-0.660	
	50冊くらい	-0.392	
	100冊くらい	-0.125	
	200冊くらい	0.881	
	300冊くらい	1.835	
ピアノの有無	400冊以上	2.087	0.628
	あり	0.852	
	なし	-1.173	
美術品・骨董品の有無	あり	1.732	0.701
	なし	-0.577	
寄与率			45.1%

- 2) 「校内」成績を尋ねているため、どの学校でも平均値は3になるはずである。しかし、学校によって平均値に差があるのは、勉強に対しての苦学意識から、自分の校内成績を実際よりも低く見積もる生徒が多い学校が存在するためと考えられる。
- 3) カテゴリカル主成分分析の結果は表13のとおりである。なお、親学歴を階層変数として用いなかったのは、欠損値(「わからない」および無回答)が多く、分析結果に選択バイアスをもたらすと判断したためである。
- 4) 文化資本スコア×中入生ダミーの交互作用項を独立変数に追加して分析を行ったところ、下位校における「学校生活に満足」と「部活動に満足」に対して、文化資本スコア×中入生ダミーの交互作用項が正に有意(5%水準)であった。つまり、下位校においては、文化階層が高い場合に限って、中入生が学校生活と部活動に満足する傾向がある。
- 5) 社会的不平等を感じているかどうかから派生する意識として、「政府は、貧しい人と裕福な人の格差を縮めるべきだ」についても同様のロジスティック回帰分析を行ったが、やはり中入生ダミーは統計的に有意ではなく、回帰係数も小さかった。
- 6) もっとも、これらの知見から、中学受験は学力形成にとって無意味であると判断することは適切ではない。なぜなら、仮に中高一貫教育そのものが学力を高めることがなくても、中高一貫校入学を目指して受験勉強を行うことが、学力を高める可能性があるからである。学業の中間目標としての中学受験の意義は必ずしも否定されない。

引用文献

安藤福光, 2005, 「中高一貫校のカリキュラム開発とその教員組織に関する調査研究 - カリキュラム・アーティキュレーション論の視点から」『カリキュラム研究』第14号, pp.75-88, 日本カリキュラム学会。

出羽隆, 2009, 『それでも私立中学受験をしますか?』, 文芸社。

井上修, 2001, 『私立中高一貫校しかない! - 教育階層化時代の勝ちぬき方』, 宝島社。

旺文社, 2012, 『首都圏2013年度入試用 中学受験案内』, 旺文社。

学習研究社, 2006, 『私立中学受験案内 2007年入試用』, 学習研究社。

片岡栄美, 2009, 「格差社会と小・中学受験 - 受験を通じた社会的

閉鎖, リスク回避, 異質な他者への寛容性」『家族社会学研究』第21号, pp.30-44, 国際文献印刷所。

木原孝博, 1982, 『学級社会学——一人ひとりを大切にす学級経営の創造』, 教育開発研究所。

須藤康介, 2011, 「私立中高一貫校の学校階層構造—マクロ・ミクロデータの分析から」『学校教育研究』第26号, pp.99-111, 教育開発研究所。

須藤康介, 2012, 「中高一貫校進学が難関大学進学に与える影響—東京都全高校データベースの分析から」ベネッセコーポレーション チャイルドリサーチネット掲載論文。(http://www.blog.crn.or.jp/report/10/03.html)

瀬川松子, 2009, 『亡国の中学受験—公立不信ビジネスの実態』, 光文社新書。

内藤朝雄, 2001, 『いじめの社会理論—その生態学的秩序の生成と解体』, 柏書房。

服部泰秀, 1995 「私学の特色ある一貫教育に関する調査・研究—教育効果の面よりみた中高一貫教育充実に関する研究」『日本私学教育研究所紀要』第30巻第1号, pp.191-209, 日本私学教育研究所。

樋田大二郎, 1998, 「中学受験—市場原理の選抜過程による社会の要請と個人の希望の調整」『子ども社会研究』第4号, pp.67-80, ハーベスト社。

藤田英典, 2006, 『教育改革のゆくえ—格差社会か共生社会か』, 岩波ブックレット。

ベネッセ教育研究開発センター編, 2007, 『中学校選択に関する調査報告書』, ベネッセコーポレーション。

本田由紀編, 2007, 『私立高校生生活・意識・行動に関する調査報告書』, 東京大学教育学部比較教育社会学コース。

松浦克己・滋野由紀子, 1996, 「私立校と公立校の選択—塾との関係を考慮した小中学校段階での学校選択」『女性の就業と富の分配—家計の経済学』, pp.61-85, 日本評論社。

油布佐和子・六島優子, 2006, 「中高一貫の現状と課題」『福岡教育大学紀要』第55集4号, pp.101-118。

(受入教員 本田由紀教授)